

(様式2)		平成26年度 学校自己目標の最終評価		鳥取養護学校	
中長期目標 (学校ビジョン)	人とのかかわりを深め、自分らしさを発揮しながら、生きる意欲や自己肯定感を育む学校	今年度の 重点目標	1. 病弱教育、肢体不自由教育の充実 2. 児童生徒、保護者、教職員の連携による創立40周年記念事業の実施 3. 児童生徒及び保護者への支援の充実 ①支援会議、サポート会議等の充実 ②心の相談活動の充実 4. 教職員の対応力の向上 5. 授業などへのICT活用の推進		

年 度 当 初				評 価 結 果 (3)月			
評価項目	評価の具体項目	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況		総合評価	改善策
1. 病弱教育、肢体不自由教育の充実	学校ネットワーク構築事業(病弱)の実施	○パートナーシップ校の教育実践・校内研究の内容が把握され、教職員全体に適宜報告されている。 ○本事業で明らかになった病弱教育の現状や課題について、教職員全体に情報が発信されている。	○パートナーシップ校の実践についてホームページや電子メール等で情報を得る。また、担当者間で教育実践上の課題などについて相談する。 ○年3回(6月・12月・2月)、パートナーシップ校全体で情報交換会を実施(参加)し、本校の情報を発信したり他校の情報を得たりする。 ○パートナーシップ校で開催される研修会等に参加し、そこで検討された内容について教職員全体に報告する。	・年3回の情報交換会の実施や研修会の相互参加によって、病弱教育のあり方について活発な意見交換がなされ、理解を深めることができた。また、随時教職員に報告した。 ・iPadを用いたテレビ会議で、日々の実践について意見交換を行った。今後、実用化に向けたネットワーク環境の整備や機器類の調整が課題となった。		B	・iPadを用いたテレビ会議による情報交換会が実用化できるように検討を行う。 ・本事業の歩みを教職員全体に発信していく。 ・パートナーシップ校の担当者間で、連絡を密に取り合い、事業の計画が滞りなく実施できるようにする。
	病弱教育及び肢体不自由教育に係る研究・研修	○本校児童生徒に関する病気や障がいについての理解を深め、学んだ専門性を生かして、授業実践を行っている。	○教職員全員が各研究グループのテーマにそった研究実践を行い、一人一授業公開(事例実践)により、授業改善に取り組む。	・各研究グループが進め方を工夫し、全職員が一人一授業(実践)公開に取り組み、授業改善を重ねた。その中で、課題意識を持ち、授業改善が日々の実践の中でどのように図られているのかについて話し合い、検討した。 ・学部によっては、教員の専門分野を決めて研修に取り組んだ		B	・互いの授業を見あったり、児童生徒と一緒に学習する時間を計画的に設定したりする。 ・本年度の研究のまとめをし、成果と課題を明確にする。 ・全職員が共通理解して研究が日々の実践とつながるようにする。
	単一障がい学級の自立活動の内容及び指導形態の検討	○指導内容表を活用し、児童生徒の実態を的確に把握し、指導ができています。 ○小学部・中学部・高等部・自立活動部で連携を取りながら、自立活動の内容及び指導形態等を見直し、改善することができている。	○小学部・中学部・高等部・自立活動部が連携して、実態把握、自立活動の内容及び指導形態等に関する勉強会等を実施する。 ○お役立ち勉強会、自立活動だより等を活用して、実践を共有する。 ○先進校視察を実施する等、自立活動の指導に関する情報や資料を収集し、情報を共有する。	・各学部と自立活動部が連携して、伝達講習や実践発表、研修会、勉強会、自立活動だより等で情報提供を行った。 ・他学部の自立活動の内容及び指導形態等を知ったり、先進校視察や研修を積み重ねたりして、自分の学部を見直し、改善することができつつある。		B	・継続して先進校視察・研修会等で情報・資料収集等を行い、研修会・お役立ち勉強会・自立活動だより等で情報提供を行う。 ・各学部と自立活動部が連携を取れるように研修会や勉強会、自立活動の会等を計画的に行い、内容の充実を図る。
2. 児童生徒及び教職員の連携による40周年記念事業の実施	教職員、児童生徒、保護者等の連携による記念式典、記念学習発表会等の実施	○児童生徒や保護者が、学校設置の経緯や歴史等について、知っている。 ○教職員や児童生徒、半数以上の保護者が自分のできる内容の事業に関わり、取り組んだ。	○創立40周年記念誌を発行し、本校の歴史を知る機会とする。 ○記念学習発表会で本校設置の経緯や歴史等について発表する場を設ける。 ○保護者と教職員の会として、記念学習発表会や校内作品展への参加を呼びかける。	・廊下掲示や鳥養通信の掲載、記念誌の発刊等を通して本校の歴史を振り返る機会を持った。 ・創立40周年記念学習発表会等では、児童生徒、保護者、教職員が一丸となって取り組んだ。		A	・創立50周年に資料を保存して引き継ぐ。
	アクティブアクション創造事業の実施	○好きな花を選び、植えたり、水やりをしたりして継続して栽培に携わる。係活動を継続して行い、達成感を味わう。 ○校歌や手話の歌を覚え、自分なりの方法ですることができる。	○花に興味を持てるよう色とりどりの花を準備して児童が選べるようにする。日々の水やりの大切さを伝えるとともに、花の成長を教師とともに体験する。 ○校歌や手話の歌を今月の歌などで日常的に聞き、発声や身振りで自己表現する力を育てる。	小	・ボランティアの方々と一緒に花の植え替えを行ったり、当番制で水やりをしたりした ・手話の歌では、今月の歌で取り組み、歌が流れると、発声で歌ったり、教師と一緒に身体表現したりする場面が見られた。	A	・卒業式に向け、今月の歌などで校歌に親しむ。
		○学校のあゆみを調べたり、卒業生等に聞き取りをしたりすることとおして、学校で学ぶことの大切さを知る。	○生徒が調べ学習、インタビューなどを通して学校の歴史等を調べたり、工夫してまとめたり、発表したりできるように取り組む。 ○造形、花の栽培、歌に親しむような活動を一緒にすることで40周年のお祝いの気持ちを表現できるようにする。	中	・調べ学習やインタビューなどを行い、学習発表会で成果を発表した。 ・校章を共同制作して掲示したり、苗植えや水やりをしたりして、お祝いの気持ちを表現した。 ・手話の歌を朝の会や音楽の時間等に親しみ、式典や学習発表会では自分なりの方法で表現した。		・音楽の学習や学部集会等で継続して手話の歌に取り組む。
		○「調べ学習(鳥取養護学校の歴史等)」、「手話の歌(心と心で)」、「傘踊り」、「花の栽培」に生徒一人一人が意欲を持って取り組む。	○「総合的な学習」を中心に調べ学習に取り組む。 ○SHR(朝、帰り)を中心に「手話の歌」に取り組む。 ○同好会を中心に「傘踊り」に取り組む。 ○作業学習、係活動、児童生徒会活動を中心に「花の栽培・管理」に取り組む。	高	・手話の歌を継続して取り組み、スキルの向上とともに生徒の意識も向上した。 ・傘踊りは同好会、音楽の授業を中心に取り組み、全国障害者芸術文化祭で披露した。 ・記念学習発表会で調べ学習を発表した		・今後も傘踊りと手話の歌を継続して取り組む。

	障がい者芸術文化祭への参加	○中・高学部単一障がい学級および重複障がい学級生活コースのより多くの生徒が大会に向けて、傘踊りや合唱に意欲的に取り組み、大会に参加することができる。	○音楽や同好会の活動中に合唱曲や傘踊りを取り入れ、大会への意識やスキルを高める。職員全体で連携し、生徒たちに大会への参加を促す。	・傘踊りは同好会、音楽の授業を中心に取り組み、全国障害者芸術文化祭で披露した	A	同好会や外部での発表の依頼等、機会をとらえて披露する。
3. 児童生徒及び保護者の支援の充実	関係者会議、支援会議、サポート会議等の適宜開催及び充実	○教職員に各種会議の趣旨が周知され、主体的に活用する姿が見られる。 ○関連する各種会議を有効に開催し、よりよい解決策を導くことができる。	○各種会議のつながりなどについて理解を図る。 ○保護者アンケートをするとともに子どもを語る会等によりニーズを把握する ○事前話し合いによって目的や方向性を確認するとともに、事後のフォローアップ(実施状況の把握、関係機関への連絡等) ○指導効果を上げている事例を適宜紹介する。	・校内支援体制が職員に周知され、保護者や児童生徒のニーズや課題に対して、よりよい解決に向けて行動化する教師の姿が見られた。 ・保護者や教師に対して行ったアンケートを実施した。日々の指導や共通理解につながったという肯定的な意見が多く、有効的に活用できている。	B	・校内支援の連続性を大切にし、学部間連携をより密にしてい。
	「子どもを語る会」「心の相談活動」の継続的实施	○課題となる児童生徒について、状況や支援のしかたについて、共通理解が図れている。 ○相談期間中、主として単一障がい学級の生徒が学期に一回は訪れ、気になっていることや悩み等を職員に相談している。	○「子どもを語る会」の記録を集約して、各種会議につながるような道筋を作る ○支援室の環境整備をして、相談しやすい雰囲気を作る。 ○毎月相談週間のちらしをクラス掲示し、期間や担当者などを周知する。 ○年3回生徒に相談希望のアンケートをとり、希望生徒に相談できる場を設定する。	・学部会や子どもを語る会、サポート会議や支援会議等を通して、児童生徒について共通理解をし、一貫した指導・支援をしている。 ・生徒への教育相談週間の認識は深まり、昨年度より利用回数が増加した。 ・アンケートを実施して、必要な生徒に相談の場を提供した。	B	・相談週間の呼びかけや相談希望のアンケート実施を継続していく。
	4. 教職員の対応力の向上	○教職員が、児童生徒や保護者等に共感的に接することができるとともに、組織の一員として必要な対応力を身につけてきている。 ○担任、学部主事、管理職の連携のもとに、保護者等への説明責任が果たせている。	○校長等による対応力研修を計画的に実施する。 ○保教の会役員と連携を密にし、役員会等で要望を精査し適切な対応に努める。 ○担任、学部主事、管理職等が常に情報を共有し、組織的な対応ができるよう連携を強化する。	・校外からの来校者から、挨拶や児童生徒への対応の姿を見て、好感が持て、変わってきたという感想がよく聞かれた。 ・保護者対応については、概ね信頼されてきている ・報告・連絡・相談は定着してきたが、十分とは言えない。	B	・研修を積み重ねを継続する。 ・報告・連絡・相談の体制がさらに強化するように機を捉えて啓発していく。
5. 授業等へのICT活用の推進	県立特別支援学校ICTを活用した学びの支援事業の実施	○教職員がICTを活用した学習をする場面が増えている。 ○iPadの活用方法について教職員の理解が進んでいる。	○活用スキルと活用意欲の向上を目的にICT活用研修を年3回程度行う。 ○実践事例の集積を行う目的でiPad活用強化月間を年3回行う。 ○職員間でアプリの情報交換を積極的に行う目的で、アプリをできるだけ多くの職員が導入する。	・ICT活用研修及び活用強化月間を年3回実施し、職員から30事例の実践記録を集めることができた。 ・児童生徒の実態に合わせ、各担任が適宜アプリを導入した。	B	・来年度に向けて、学習用無料アプリのすべての機能が活用できるようアプリの有償化の検討を進める。 ・良いアプリを担当一人一人が効果的に検索したり、アプリ情報の集積されたインターネットサイトを紹介したりする研修を計画する。
	ICT(タブレット端末等)を活用した教材づくりの普及	○iPadで教材を作る研修会に多くの教職員が参加し、その方法を理解している。 ○iPadを日常的にコミュニケーション支援機器として活用する教職員がいる。	○お役立ち勉強会を活用し教材作りの研修会を年3回程度開催する。 ○終礼などでコミュニケーション支援アプリの紹介を毎月2回程度行う。	・研修や学部で勉強会を3回以上実施し、職員が積極的に教材作りをしようとした。 ・終礼等を活用してアプリや機器の使用の具体例を紹介した。	A	・学習用無料アプリのすべての機能が活用できるようにアプリの有償化を推進する。
	ICT(タブレット端末等)を活用した授業の充実	○全教職員が何らかの学習場面でiPadを活用する計画を立て、実践している。	○各学部ごとに学部会や終礼の時間をとおして、お互いの授業におけるiPad活用を紹介し合う。 ○校長が行う評価育成面談で、教職員の授業におけるiPadの活用計画や実践状況を把握する。	・授業の記録や学習資料、学習内容の定着等としても活用した。 ・作品などの制作や情報収集等積極的に学習に活用し始めた。 ・教職員の研修などもあり、活用方法等の知識が深まりつつある。	B	・児童の実態に合ったアプリの事例を報告し、共有する。

A:十分達成(100%) B:おおむね達成(80%) C:変化の兆し(60%) D:まだ不十分(40%) E:目標の変更